

Ouroboros

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Aug. 31, 2023

東京大学総合研究博物館ニュース

The University Museum, The University of Tokyo



鎌倉時代人の頭骨（本館特別展『骨が語る「生と死」日本列島一万年の記録より』）。

本館特別展示

骨が語る「生と死」日本列島一万年の記録より

海部陽介

はじめに：足元からヒューマン・ダイバーシティを問い直す

縄文時代といえば、奇抜なデザインの土器や土偶をイメージする人が多いのではないだろうか。しかし私たちは、それを創った縄文人の素顔をどれだけ知っているのだろうか？ 鎌倉時代といえば、幕府を築き運営した、あるいは共謀して裏切った武将たちを思い浮かべるかもしれない。その一方で私たちは、当時の一般の人々については何を理解しているのだろうか？ 産業や流通が発達した江戸の町人のイメージは、浮世絵や落語から伝わってくる。しかし当時は、日本史上最も低身長で、小顔化が進行し、歯並びの悪化が目立つ時期だったことを知っているだろうか？ このような祖先たちの知られざる姿を直接教えてくれるのが、彼ら彼女らが残した骨、つまり遺跡から発掘される古人骨である。

東京大学総合研究博物館には、1877年のE・モースによる大森貝塚の発掘以来、日本各地で収集されてきた古人骨が数千体分保管されている。本展では、そうした骨が語る祖先たちの「生き様」、「死

との向き合い方」、そして「病魔との闘い」を紹介したい。本展が、列島内でも実に多様であった人々の生き方や考え方に触れ、ヒューマン・ダイバーシティの本質をとらえ直す機会となれば幸いである。

第一部：骨が語る「生」

日本史上最高のマッチョマン / 筋骨たくましい縄文人の中でもとりわけ頑丈な集団がいた / 骨があらわす縄文の生活 / 大けがを負って / 彫りの深い顔立ちの縄文人は歯並びが整っていた / 奇抜なデザイナーたちには不思議な習慣があった / 戦争の証拠がなく平和にみえる縄文時代に暴力行為はどれほどあったのだろうか？ / 激動する社会のはざまに①渡来系集団の到来（弥生時代） / 激動する社会のはざまに②変わる顔つき（古墳・飛鳥・奈良時代） / 長頭で反った歯だが歯並びの乱れは少ない鎌倉時代人 / 豊かさに伴った長寿化と小顔化と歯並びの悪化と低身長（江戸時代）

ここでは本展で扱う上記のテーマのうちいくつかを紹介する。

<マッチョ縄文人：図1> よく運動

すると、骨は太く頑丈になる。縄文人の四肢骨は平均的に現代人より太いが、そんな縄文社会にも集団差があった。上腕骨を比べると、男女とも、内陸より海辺に暮らす集団の方が太いのである。これは積極的な海洋活動の結果と考えられるが、その中でも愛知県渥美半島の突端に位置する保美貝塚の男たちの腕は、他の海浜集団と比べてもとりわけ太かった。保美貝塚の考古学的分析からは、伊勢湾のみならず外洋（遠州灘）での活発な漁や、近畿地方の二上山からの石器石材（サヌカイト）の海上運搬の証拠が得られている。おそらく保美村の男たちは、丸木舟を駆使して頻繁に外洋へ出ており、それがこの際立った特徴を生んだのだろう。

<身を飾る風習：図2> 腕輪、耳飾り、入れ墨などの風習が知られる縄文人だが、彼ら彼女らの身体装飾はそれだけではなかった。ここで紹介する抜歯は、健全な前歯を抜き風俗で、集団構成員の大半にほどこされており、成人儀礼などの意味があったらしい。この風習は縄文時代の中期以降に広く流行し、晩期の東海地方では上下合わせて8本の歯を抜く

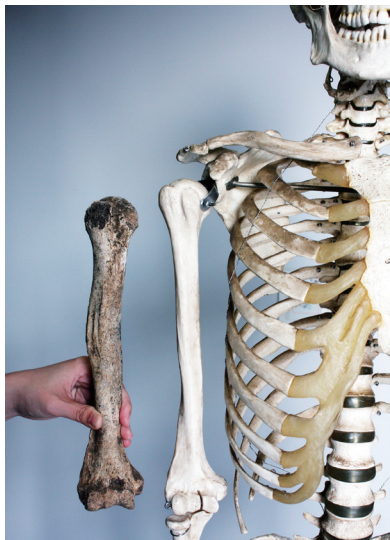


図2 一部の歯を抜き（風習的抜歯）、切歯に刻みを入れた（叉状研歯）縄文人の男たち。叉状研歯は特定の人だけが許されていた習俗のようだが、愛知県伊川津貝塚で見つかったこの3人は、1つの墓に合葬されていたことで有名である。

図1 現代人男性の骨格模型と比較した保美貝塚（愛知県）の男性の上腕骨。

図3 時代によって大きく異なっていた歯並びとその背景にあるもの。

下：縄文人，中央：鎌倉時代人，右上：鎌倉時代の箸（所蔵：鎌倉市教育委員会），右下：江戸時代人（所蔵：国立科学博物館）。



など過激化した。叉状研歯^{さじょうけんし}は切歯に刻みを入れるもので、縄文時代晩期の東海～近畿地方にあった特異な習俗である。集団内の一部の人だけにみられるので、特別な地位や身分を表していたとの解釈がある。

＜変化した歯並び：図3＞ 縄文人の歯並びは、現代人からみると異様である。歯の摩耗^{さうもう}（咬耗）が著しく、上下の切歯の先端^{せつたんこう}どうしがかみ合っている（切端咬合^{せつたんこうごう}）が、実は先史時代においては、世界のどこでもこれが人類にとってふつうの姿だった。さらに歯並びが美しい（大きな乱れがない）ことも特徴だが、これはよく噛む食生活のために縄文人の顎骨は発育良好であったことと、激しい咬耗が関係してそうになっているらしい。

この状況は歴史時代に大きく変わった。鎌倉時代では、歯並びは悪くないが、反っ歯（出っ歯）の人が増えた。前歯の咬耗が減ったことが主因でそうなったのだが、この時期には箸が普及していたことが一因となり、前歯をあまり使わない食生活が一般化したのだろう。



図4 小顔化とおはぐろの痕跡を示す江戸の女性（所蔵：国立科学博物館）。

現代のように歯並びの乱れが目立つようになったのは江戸時代からであるが、その理由は次の現象からさぐることができる。江戸時代には前歯も奥歯も咬耗量が減る傾向があり、摩耗性の低いやわらかい食物が一般化していた。同時に顎骨が小型化し、特に貴族や武家の間では「小顔化」が進行したことがわかっており（図4）、よく咬まない食生活のせいで顔面骨がいわば「発育不良」を生じていた。つまり、歯のサイズは変わらないまま、顎骨が大きく成長せず、歯の摩耗も減ったために、歯が歯槽骨に並びきらなくなったということらしい。

＜暴力の証拠？＞ 弥生時代と異なり、縄文時代には集団間の組織的な戦闘行為（戦争）が行われた証拠がない。それでは縄文人は、暴力とは無縁でいつも平和な暮らしを送っていたのだろうか？

結論から言えば、縄文人の社会にも個人的な暴力は存在した。ただし現時点では、その実態はまだ明らかになっていない。特に注目される例として、頭骨に激しい力で穴があけられた例がいくつか知

られている（図5）、その分析が待たれる。

第二部：骨が語る「死」

盤状集骨葬（縄文時代） / 廃屋墓（縄文時代） / 多人数集骨葬・犬の埋葬（縄文時代） / 横穴墓（古墳・飛鳥・奈良時代） / なぜ人骨がないのか（奈良・平安時代） / 共同墓地の出現と合戦の犠牲者（鎌倉時代） / 誰もが墓地に葬られる時代の到来（江戸時代）

新しい人が亡くなると、残された者たちはその死と向き合うことになるが、そのあり方は、時代や地域によって想像を絶するほど多様だった。本展で紹介する例をご覧ください、人の死への観念が列島内でも大きく変わってきたことを実感いただきたい。

縄文人は、集落の中に墓地をつくったり、一度埋葬した故人の骨を取り出し他人のものとして混ぜて幾何学的に再配置したりするなど、現代の常識では考えられないようなことを行っていた（図6）。総じて葬送儀礼は複雑多様で、生者と死者の距離が近かったように思える。



図5 頭頂部に謎の2つの穴があいていた縄文人男性。

Ouroboros



図6 14人以上の遺骨を五角形に再配置した縄文の墓（愛知県保美貝塚）。一部の骨は元来の位置から若干動いている（写真：田原市博物館）。

図7 鎌倉の集団墓地から出土した合戦の犠牲者と思われる頭骨。刀、槍、鈍器などによる傷痕がみられる。



大陸から影響を強く受けた弥生時代になるとその関係性は変化し、次の古墳時代には墓が集落から明確に分離するようになる。ただしこれらの時期については、まだわからないことも多い。例えば、古墳時代の墓としてよく知られるのは巨大な墳丘や小規模の横穴墓などだが、前者は王族や貴族が権威の象徴とし、後者は官人など一定の有力者が親族単位で使ったものと考えられる一方、庶民がどこに葬られていたのかは定かでない。

その後の奈良～平安時代は、どの社会階層においても、人骨の出土例が極めてまれな時期となる。それは上流階級の間で薄葬思想（儒教の影響）や火葬（仏教の影響）が広まっただけでなく、庶民は遺体を山野などに放置することが多かったからで、つまり墓が重要視されない時代風潮があった。

庶民による遺体遺棄は中世にも行われていたが、この時期に入ると、集落の周縁に共同墓地がつくられるケースが出て

くる。鎌倉幕府のお膝元、鎌倉市の由比ガ浜もその一例で、そこからは庶民や合戦の犠牲者と思われる人骨が多数みつかっており（図7）、当時の世相を伝えてくれている。

墓地をつくる風潮がさらに加速し、街中の寺の境内に墓が造られるようになったのは、檀家制度などのもとに仏教が庶民生活に浸透した江戸時代のことである。江戸の墓は被葬者の身分を反映しており、ふつう武家は甕棺に、一般の町人は円形木棺（早桶）に納められるといった区別があり、下層民の墓域では無秩序な埋葬が行われていた。それでも、若年者や身寄りのない者も含めた大勢の一般大衆が墓地に埋葬されるようになったことは、日本史における大転換といえる。

第三部：病との闘い

がん / 結核 / 梅毒

骨は、祖先たちが時代を通じて様々な病魔と闘ってきたことを教えてくれる。パンデミックにより外から日本列島へ持

ち込まれた感染症もあれば、徐々に身体を蝕む不治の病もあった。

梅毒はトレポネーマ原虫による感染症で、感染後数年を経た第3期になると骨を含む全身で破壊性病変が進行し、致死的症状をもたらす。主に性行為によって感染するので、原虫は外気に触れることなく人体内にとどまり、人を介して世界中へ広がることができる。梅毒の起源は不明だが、都市化による人口集中が感染機会を広げ、15世紀末にヨーロッパで大流行した後、ヴァスコ・ダ・ガマが確立したインド航路をつたってアジアへ飛び火した。文献による日本最古の感染記録は室町時代で、江戸時代の江戸では大流行したとされるが、それは人骨からも確認されている。日本国内における梅毒感染状況は戦後に改善したが、2010年以降、特に若者の間で急増しており、注意が呼びかけられている。



（本館教授／人類進化学）

東京大学総合研究博物館 特別展

『骨が語る「生と死」 日本列島一万年の記録より』

会場：東京大学総合研究博物館・本郷本館

会期：2023年9月30日～2024年2月22日

開館：平日と9/30～12/23の土曜日

※詳しい日程・イベント・参考文献等についてはウェブサイトをご覧ください



企画/構成：海部陽介 フロアデザイン：洪 恒夫

グラフィックデザイン：関岡裕之 動画製作：松本文夫

協力：国立科学博物館、福島県立博物館、鎌倉市教育委員会、田原市博物館、

三鷹市教育委員会、神奈川県立歴史博物館、慶安寺

近藤 修、坂上和弘、キャサリン・ハンプソン、平野力也、皆川真莉母、

中村 凱、高木蔵之助、中村謙伸、学部生の皆様

<企画者紹介>

海部陽介 東京大学総合研究博物館教授。専門は人類進化学。理学博士。化石の研究とフィールドワークなどを通じ、約200万年におよぶアジア人類史を研究。国立科学博物館在籍時に「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」（2016～2019）を代表として実行。著書に『人間らしさとは何か』（河出書房新社）、『サピエンス日本上陸』（講談社）、『日本人はどこから来たのか？』（文藝春秋）など。日本学術振興会賞（2012）、海洋立国推進功労者表彰（2021）などを受賞。

研究紹介

日本の海産魚類相は 100 年前から現在までにどう変わった？ — 東京大学の魚類古標本コレクションから見えるもの —

和田英敏

はじめに

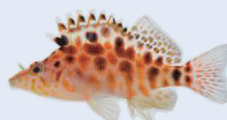
我々人類は有史以来、食物や資源など海洋生物から多くの生態系サービスを得て豊かな生活を送ってきました。特に食用とされる海産魚類については、その多様性や資源量も相まって日本独自の食文化を醸成するにあたって重要な役割を果たしてきました。そして、このサービスは海洋生態系のバランス、そして関連する物質循環サイクルの健康度に大きく依存しています。しかし、日本においては海産生物の生息環境である多くの海域において、明治時代以降の近代化の影響にともなう水質汚濁・生息域の破壊、乱獲などの影響を受けるとともに、地球温暖化などの気候変動にもさらされているのが現状です。この影響に対する評価指針の一つに環境における種多様性の評価が挙げられ、そのためには種の識別に必要な分類学的研究および分布などの生物地理学的基础知見の蓄積が不可欠であり、現在の種多様性を評価するためには過去の生物相の情報もまた不可欠です。

日本においては20世紀初頭以来、その水圏環境の魚類を対象とした生物相である「魚類相」の研究が盛んに行われてきました。近年においては現代的な博物館資料のデジタルアーカイブの登場に代表される高度情報化、形態分類学的研究の発展による度重なる新種の発見とそれぞれの種の識別法をまとめた近代的な書籍の登場、環境DNAメタバーコーディングに代表される分子生物学分野からの種の識別・多様性評価の新技法の登場などの要因により、種多様性の評価技術は20世紀後半以降に大きく発展を遂げました。そのため、20世紀後半以降の海産魚類の分布と種多様性の評価は高い信頼性をもつものと考えられています。そ

の一方で、日本において近代科学の導入初期にあたる20世紀初頭にまとめられた日本の魚類相や分布をまとめた文献は、現在の知見に基づくとその同定結果の信頼性に疑問の余地があるものが多く、また形態的によく似る複数種を単一の種として扱っている場合も多くあります。1938年に東京高等師範学校(当時)

の岡田彌一郎と京都大学の松原喜代松の共著で出版された当時の日本産魚類相の最新文献である「日本産魚類検索」では1,946種が日本産魚類として認められています。2023年8月時点で確認された日本産魚類の総種数は4,700種以上のほります。この確認されている種数の著しい経年的増加の要因は多岐にわたり

例1: 日本初記録種あるいは新種として発見 **増**



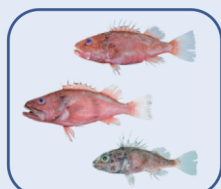
キリンゴンベ
(2021年初記録)



イズベニハゼ
(2022年新種記載)

例2: 識別され、種が細分化された **増**

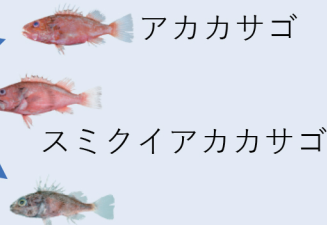
1940年以前の知見



アカカサゴ

※外見が似ている為、
同一視されていた

現在の知見



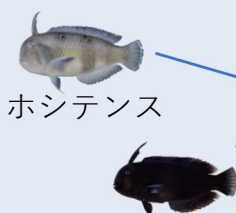
アカカサゴ

スミクイアカカサゴ

アズキカサゴ

例3: 同じ種内の変異だとわかり、まとめられた **減**

1940年以前の知見



ホシテンス

クロテンス

現在の知見



ホシテンス

※クロテンスは
ホシテンスの黒化個体

図1 分類学的研究の発展に伴う日本産魚類の種数増減の例 (標本写真提供: 神奈川県立生命の星・地球博物館, 瀬能 宏氏)。

Ouroboros

ますが、大きな要因としては分類学的研究の発展により今日までに日本において新種および初記録種の発見が相次いでいることと（図1：例1）、これまで近似種と似る故の一つの種として扱われていた複数種（隠蔽種）が、分類学的研究の発展によりその識別方法が確立され認識が可能になったことなどが挙げられます（図1：例2）。今日までの魚類の分類学的研究は、従来複数種と認識されていたタクソンが、その種の形態学・生態学的要素の同一性から同種としてまとめられる例も多くありましたが（図1：例3）、むしろ新たな種が見つかったり、従来単一のものとして扱われていたタクソンの識別方法が確立し細分化される例の方が圧倒的に多くありました。すなわち、これらの文献が示す20世紀初頭の日本産魚類の種多様性は現代から見ると過小評価されている可能性が高く、種同定の信頼性も乏しい故に各種の分布が正確に把握できないため（そもそも詳細な記述も少ない）、現在の魚類相の種多様性の健全性を過去の記録を参照して評価する際にデータがそのまま使えないという問題を抱えています。

日本近海産魚類における長期スパンでの分布変遷や種多様性の変化を知るためには20世紀初頭の魚類相情報の再整理が急務と言えます。筆者はこの問題を解決すべく、日本近海産の“古標本”の情報をデータベースにより整理し、時空間的な分布の変遷をモニタリングするとともに、現代の分類学的知見にもとづき正確に同定することで、日本近海産魚類の長期的な分布の変遷と種多様性の変化を評価するという研究を行っています。

日本の原風景を語る古標本

ここで取り扱う“古標本”とは、1940年以前の日本から得られている標本群を指し、このような標本群はスミソニアン国立科学博物館（アメリカ合衆

国）、ベルリン自然史博物館（ドイツ）、ライデン国立自然史博物館（オランダ）、国立科学博物館（日本）、東京大学総合研究博物館（日本）など様々な博物館に数多く残されています。特に1840年代から1940年代にかけて収集されたこれらの標本群は、当時の日本の魚類相を把握するために分布および分類群を網羅・横断的に収集されたものであり、1940年代以前というのは日本において高度経済成長にともなう環境破壊の激化が始まる前の比較的健全な自然環境が残っていた時代でもあります。例えば東京湾の水質汚染は1950～1970年頃までにピークに達しており、諫早湾干拓事業に代表される有明海の大規模な国営干拓事業は1933年からが始まっていますが、古標本はそれら手付かずの自然環境から得られています。したがってこれらの古標本コレクションに見て取れる種多様性はかつての日本の健全な自然環境を大いに反映するものであり、言わば当時の日本の自然がそのまま切り抜かれたタイムカプセルとして、20世紀初頭の魚類相情報を得るためのこれ以上を望めない資料となっているのです。一方でこれらの古標本は、現在の分類体系にしたがった正確な同定がなされていない場合が多く、情報を抽出し検討を行うにあたってはそれらを現在の知見にもとづき再同定し、データを整理する必要があります。

東京大学総合研究博物館においては現在魚類標本コレクションの整理事業が進められており、その過程で有志のボランティアや各タクソンの分類の専門家を含む研究事業協力者の助力も得た上での標本の再同定も進められてきました。その結果、100年前の日本沿岸域の魚類相の知られざる一面が見えてきました。

古標本から垣間見る日本産魚類の100年単位の分布変遷

東京大学総合研究博物館の動物部

門が所蔵する魚類標本コレクション（ZUMT: Department of Zoology, The University Museum, The University of Tokyo）は、1900年代の初頭より収集された日本最古級の標本群であり、現在までに約66,000件が登録・収蔵されており、一つの登録番号に複数個体が登録されていることも多いために、その総数はおよそ150,000個体に及ぶと推定されている膨大なコレクションです。これらは近代魚類分類学の父とも呼ばれる東京帝国大学理学部（当時）の田中茂穂により収集された標本群に端を発するコレクションであり、そのおよそ8割がおおよそ100年前にあたる1940年代以前の日本及びその近海域から網羅的に収集されたもので占められているため、当時の日本の魚類相を何うにあたって申し分ない資料であると言えます。一方でこれらの古標本は、現在の分類体系にしたがった正確な同定がなされていない、採集場所や日付などの属性情報が整理されていない、あるいは正確性が十分に検討されていないなどの問題を抱えていました。また、これらは専ら魚体の丸ごとをホルマリンやエタノールの水溶液に浸漬した液浸標本として収蔵されているのですが、液浸標本は定期的な保存液の追加・交換などの管理を要する資料であるにもかかわらず、1967年以降に魚類標本の専任管理者が居なかったことによる管理不足により保存状態の悪化にもさらされていました。

そのような状況で、東京大学理学部であり動物部門主任の上島 励氏、研究事業協力者の藍澤正宏氏（元宮内庁）、および坂本一男氏（おさかな普及センター資料館）は専任者不在の中それ以降のZUMTコレクションの維持作業を続けてきました。2021年には東京大学総合研究博物館に特任助教として小枝圭太氏（現在は琉球大学理学部）が就任し、同氏は国立科学博物館（当時）の畑 晴

陵氏を研究事業協力者として新たに迎え、学外・学内のボランティアおよび外部研究者の協力を得た上で、大規模な標本整理事業を展開しました。この事業は小枝氏が収蔵標本リストの作成を指揮することにより飛躍的に進むようになり、10,000件を超える標本が整理されたのみならず、その成果は内外の研究者の分著も加えられた2編の特別出版物「東京大学総合研究博物館動物部門所蔵魚類標本リスト (1)・(2)」により報告されました(図2)。このリストは同館所蔵標本を科あるいは目単位で最新の分類体系にしたがい同定し、採集地や日付などのデータを精密に記したものであることから、当時の魚類相を垣間見る資料にもなっています。

この標本の整理事業の過程における詳細な生物地理学的検討から、日本近海産魚類の100年スパンでの分布変遷を垣間見るような知見が次々と明らかになってきました。一つはチョウチョウウオ科、クロホシマンジュウダイ科などの南方系沿岸性魚類が、現在知られている各種の北限よりも低緯度の海域で採集されているということです。例えば、クロホシマンジュウダイ *Scatophagus argus* (Linnaeus, 1766) は東部インドー西部太平洋の熱帯性から亜熱帯に主に生息しており、日本においては秋田県以南の日本海・太平洋沿岸域において多く記録されています。ところが、本種の標本は台湾、海南島、フィリピン、シンガポールなどから得られた標本が含まれる一方で、琉球列島を含めて当時の日本からは一切得られていないことが分かりました(図3)。クロホシマンジュウダイが日本から記録されたのは1960年代以降であり、1975年に出版された「南日本の沿岸魚」においてはその分布が本州まで拡大していることが述べられており、近年になっても東北地方での記録例が相次いでいることから、100年前の日本には本種が分布しなかったものの近年になって分布を拡大していることが推察されま

す。日本近海の海洋環境は刻々と変化を続けており、特に海水温についてはこの100年で1.19°C上昇しています。しかし、このような分布の水平方向の変化例がどのようなタクソンの見られ、どのような環境変動がそれに影響を与えるかについては、未整理のタクソンも多いことから十分に把握できていないのが現状です。

また、一部の深海性魚類においては現在では分布が確認されていない浅海域で採集されていたということも明らかとなりました。九州西部に位置する有明海は最深部でも165mを超えない遠浅の内海であるものの、1930年以前に収集された有明海産の標本群には、イソキホウボウ *Satyrichthys rieffeli* (Kaup, 1859)



図2 2021年以降の整理事業によりまとめられたZUMT魚類標本リスト。



図3 台湾・澎湖島から得られたクロホシマンジュウダイ (ZUMT 37423, 標準体長81.6mm)。

Ouroboros

やカゴカマス *Rexea prometheoides* (Bleeker, 1856) など現在では主に隣接する海域の水深200—400mに生息する深海性魚類が含まれていました(図4)。これらの魚類は20世紀後半以降に有明海において一切確認されていないものの、近隣の東シナ海や鹿児島湾においてはごく普通に漁獲されるため、何らかの環境要因の変化により有明海から姿を消し、生息海域を遷移したものと推察されます。現生する深海性魚類の現在の分布は後期更新世以降に成立した海流・水温・海底地形などの環境条件に依存するとともに濁度などの水質の影響を受けることが判りつつあります。今後はこのような

深海性魚類において認められた100年スパンでのダイナミックな垂直・水平方向の分布の変化が、どのようなタクソンにおいて見られ、どのような要因によって、いつごろから起こったものなのかを、古標本の情報から把握したいと考えています。

そして、ギンリンサッパ *Sardinella albella* (Valenciennes, 1847) などの近隣の海域には生息するものの現在では日本においては絶滅した可能性のある種の標本が、1930年以前の日本から得られていることもわかってきました。ギンリンサッパはインド・西太平洋の熱帯海域に広く分布するニシン科魚類であり、台

湾やフィリピンでは多く漁獲されています。日本からは1920年から1930年の間に琉球列島沖縄島の中城湾から4標本のみが得られており、それらが現在残されている唯一の日本産標本となっています(図5)。これらの標本が得られた中城湾はかつてリュウキュウドロクイ *Nematalosa come* (Richardson, 1846) やドロクイ *N. japonica* Regan, 1917 といったニシン科魚類が豊富に得られた海域であったものの、1980年代以降の湾内埋め立ての進行に伴い環境が悪化したことから、これらの漁獲量は著しく減少しています。ギンリンサッパの標本はそれ以降に中城湾から得られておらず、本種が生息できる環境は日本に残されていないものと考えられています。このことは整理事業の過程で畑氏がニシン科魚類の古標本を整理したことでようやくわかったことであり、同氏により2022年に本種に対して新標準和名「ギンリンサッパ」が提唱され、日本初記録種として報告されたころには、この種は既に日本から姿を消していました。

このようにZUMTコレクションの整理事業の過程で、日本近海の魚類相に100年スパンでの劇的な変化が生じていることが明らかになってきました。現在この整理事業は上島氏、藍澤氏、および坂本氏に加え2023年1月に本館に赴任した筆者のもと継続されており、残りおよそ45,000件と見積られる標本の整理と研究活動が進められています。古標本が導く100年前の海へのタイムトラベルは、まだまだ始まったばかり。東京大学総合研究博物館に眠る古標本たちは、これから私たちにどのような自然の姿を見せてくれるのでしょうか。



(本館特任助教／魚類学)



図4 有明海から得られたイノキホウボウ(上: ZUMT 17688, 標準体長117.2mm)とカゴカマス(下: ZUMT 46010, 標準体長176.0mm)。



図5 中城湾から得られたギンリンサッパ(ZUMT 17185, 標準体長71.9 mm)(標本写真提供: 畑 晴陵氏)。

ホームカミングデイ

見て、聴いて、触れる —大学博物館でのマクロ先端研究

矢後勝也¹・金崎由布子²・三木健裕³・尾寄大真⁴・大森貴之⁵・工藤光平⁶

東京大学では、ホームカミングデイという公開行事を毎年10月第三土曜日に開催している。この行事は、卒業生や修了生をはじめ、その家族、東大ファン、近隣の方々が本学キャンパスに集い、各部署で行われる様々な催し物に参加しながら、本学の研究・事業内容を知り、より身近に感じてもらうとするオープンキャンパス型イベントである。2002年に本学の同窓会組織が一堂に会して第1回をスタートさせ、その後は2004年の大学法人化を機に大学主催となって現在まで続けられている。新型コロナ感染状況の影響から、2020年と2021年は全面オンラインにて催されたが、今回の2022年10月15日開催の「第21回東京大学ホームカミングデイ」は、「対面」、「ライブ配信」、「オンデマンド」と複数かつ

多様な形式で実施された。

我々が所属する総合研究博物館では、「見て、聴いて、触れる—大学博物館でのマクロ先端研究」をテーマに掲げ、本館展示場にて対面で行なった。このイベントの趣旨は、博物館に所属する若手教員・研究員が自ら進めてきたマクロ事象を扱う研究内容を展示場にて紹介しながら、実際に用いた標本・資料を手にとって、直に研究を体感してもらうことであった。また、普段は開放していないバックヤードの見学も大きな目玉として取り入れた。いずれも一般の参加者が触れることのない研究現場に接することで、博物館で展開されている研究への関心を深めることが狙いである。なお、過去には同様の公開イベントとして「ハンズオン・ギャラリー」シリーズを催してきた

が(門脇ら, 2010; 鶴見ら, 2012; 小高ら, 2020など)、今回のホームカミングデイに合わせた博物館イベントは、これに近いコンセプトとなった。本館1階の展示場に配置された5つのギャラリー(図1)のタイトル・解説担当者・趣旨は、以下の通りである。

ギャラリー①(図2, 3)

「標本から昆虫研究の科学と温故知新に触れる」矢後勝也(昆虫自然史学)

バックヤードの昆虫収蔵庫内で、昆虫標本を間近に観察しながら形態の特徴やその意味を考えるとともに、標本から紐解く環境変動や歴史生物地理などに触れ、生物多様性保全の重要性を体感してもらいます。

ギャラリー②(図4)

「山と森の狭間で—アンデス東斜面の考古学」金崎由布子(アンデス考古学)

アンデスの高山地帯とアマゾンの熱帯雨林の狭間に位置する、アンデス山脈東斜面では、二つの伝統が融合したような特異な古代文化が発達しました。1960年代から最近年まで、東京大学が行ってきた当地域の研究成果を、資料とともに紹介します。

ギャラリー③(図5)

「西アジア・イランの土器に触れて体感する古代の暮らし」三木健裕(西アジア考古学)

イランは、世界ではじめて農耕牧畜がおこなわれた西アジア地域に属します。イランでは農耕牧畜がはじまった際、どのような暮らしが営まれていたのでしょうか。遺跡から実際に見つかった土器に触れて、当時の生活の一片を探ります。

ギャラリー④(図6)

「年代を測る加速器質量分析計(Accelerator Mass Spectrometer)」尾寄大真(年

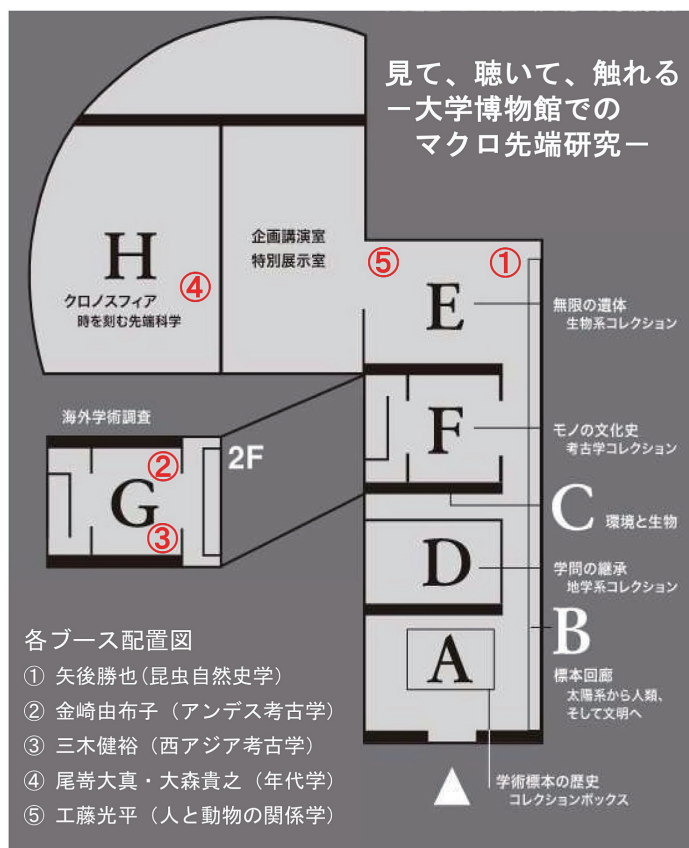


図1 東京大学総合研究博物館の本館展示場内に示されたギャラリー配置図。番号①～⑤はそれぞれギャラリー①～⑤に対応している。

Ouroboros



図2 ギャラリー①「標本から昆虫研究の科学と温故知新に触れる」の様子。参加者には顕微鏡下でチョウ類の交尾器・発香鱗・前脚による雌雄や近縁種同士の違いを観察できるようにした。



図3 ギャラリー①で公開した昆虫収蔵庫とその通路沿いに展示した昆虫標本。



図4 ギャラリー②「山と森の狭間で—アンデス東斜面の考古学」の様子。東京大学が継続して調査を行ってきたアンデス山脈東斜面、ワヌコ州の発掘調査の資料を展示した。また、iPadを用いて遺物を3Dで紹介した。



図5 ギャラリー③「西アジア・イランの土器に触れて体感する古代の暮らし」の様子。約8300-6500年前のイラン南部、マルヴダシュト平原の3遺跡で見つかった土器を展示した。参加者には土器に触れてもらい、約2000年の間に起こった土器の変化を理解していただいた。

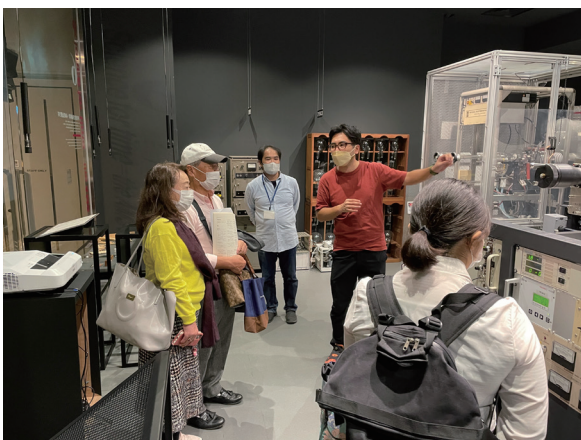


図6 ギャラリー④「年代を測る加速器質量分析計 (Accelerator Mass Spectrometer)」の様子。実際に稼働している加速器質量分析計の目の前にしてその原理やどのような研究に利用されているのかなどについて解説した。



図7 ギャラリー⑤「さまざまな皮からその動物の生き方を知る」の様子。動物のなめし皮や仮剥製に直接触わり動物ごとの皮膚付属器の特徴を詳細に観察できるようにした。

代学・宇宙地球化学)・大森貴之 (年代学・分析化学)

加速器質量分析計は極めて少ない量の同位体を測定するための装置です。資料の中に残っている、決まった速度で減少する放射性同位体・炭素14を測定することで、資料がどれくらい古いものであるか知ることができます。普段はガラス越しにしか見ることでできない加速器質量分析計の実物を間近に体感しながら、その仕組みについて解説します。

ギャラリー⑤ (図7, 8)

「さまざまな皮からその動物の生き方を知る」工藤光平 (人と動物の関係学・機能形態学)

外界と動物体の境界をつくる皮。この展示では哺乳類、鳥類、爬虫類と色々な動物の皮を手に取りながら、毛、羽、鱗の着き方の違いや、色や形の多様さを自由に比較し観察してもらいます。リアルな動物の存在を手触りで感じながら、それぞれの動物の生き方を考えてみましょう。

解説担当者はこれらのギャラリーに各自専門とする学術資料・標本を展示、あるいは検鏡できる機材をセットし、実物



図8 博物館本館地下1階で開催されたバックヤードツアー。動物骨格標本の収蔵庫に案内して保管状況や標本作製法などを解説した。

に触れてもらうことを主体としながら、研究内容をそれぞれ効果的に伝える工夫を凝らした。また、ギャラリー①と④(図2, 3, 6)ではそれぞれ収蔵庫と測定室に参加者を入れてバックヤードも見学できるようにした他、ギャラリー⑤を担当した工藤は本館地下1階にある動物骨格標本の収蔵庫に案内しながら解説するバックヤードツアーも行なった(図8)。参加者は解説担当者の話を聴きながら、興味深く標本・資料を手にとったり、間近で観察したりして、日頃できない体験にとっても楽しんでいただいていた様子であった(図2-8)。

展示場の入り口から中央までは歴史ある博物館コレクションの粋を集めた常設展「UMUTオープンラボ」が広がり、その奥では建築模型や映像作品を展示した特別展示「空間博物学の新展開」が催されていたことで、博物館学や展示品に関心の高い参加者が長く滞在する傾向にあった。その上、コロナ対策により館内の同時滞在人数を原則として30名程度に調整していたため、一時は博物館正面口に長蛇の列ができたほどである。最終的に300名を超える参加者が来館され、コロナ禍にも関わらず大盛況の中で無事に終了することができた。来館者層としては、特に親子連れが目立ち、20～30歳代の若い世代も多かった。最近、当館ではコレクションの保管・展示機能の改善を目的とした寄付を募る東京大学コレクション未来基金を創設したため、来館者全員に本基金のリーフレットも配布した。これをきっかけに少しでも支援者が増えると喜ばしいところである。

博物館内の研究者は、普段はそれぞれ独自の研究を行っているため、他の研究者が進めている分野に直接触れることは少ない。今回のホームカミングデイは単に来館者への研究発信や教育活動だけでなく、お互いの専門性をよく知る良い機会になる。そこで出会ったことのない見方や手法を学ぶことにより、学問の知識を増やすとともに、多面的かつ学際的な

研究への発展が見込まれ、新たな学問が創生できる可能性にも繋がる。このような分野横断的な研究姿勢を養うことができるのであれば、一つのイベントを我々研究者が共同で開催することも、大変意義があることと言えよう。

今回の開催にあたり、本館ボランティアの方々にも多大なるご支援を賜った。また、井上暁生氏、大澤夏子氏、武田精一郎氏には解説担当者の補助でご協力をいただいた。本館博物館事業課係長の佐藤一昭氏には本稿で使用した写真の一部をご提供いただいた。末文ながら各氏に心よりお礼申し上げる。

引用文献

- 門脇誠二・黒木真理・矢後勝也・鶴見英成, 2010. *Ouroboros*, 15 (2/3): 20-23.
 鶴見英成・矢後勝也・門脇誠二・黒木真理・矢野興一・尾寄大真・久保麦野・藤原慎一・服部創紀, 2012. *Ouroboros*, 16 (3): 12-13.
 小高敬寛・久保 泰・尾寄大真・楠野葉瑠香・黒木真理・新原隆史・矢後勝也, 2020. *Ouroboros*, 24 (2): 12-14.



¹本館研究部講師

／昆虫自然史学・保全生物学、

²本館研究部助教／アンデス考古学、

³本館研究部特任助教／西アジア考古学、

⁴本館研究部特任研究員

／年代学・宇宙地球化学、

⁵本館研究部特任研究員

／年代学・分析化学、

⁶本館研究部特任研究員

／人と動物の関係学・機能形態学)

Ouroboros

福島県楡葉町分館

楡葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」の開館

佐々木猛智¹・三河内 岳²・洪 恒夫³・松本文夫⁴・白石 愛⁵

2023年4月22日、福島県楡葉町との連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」がオープンした。東京大学総合研究博物館では、本郷キャンパスの狭隘化の解消と館外ネットワークの構築を目指して多館体制を進めており、福島県における初めての拠点となる。この分館は、楡葉町と東京大学総合研究博物館の連携により、地球の歴史から町の歴史、未来について46億年の壮大な時間軸の展示を実現したものであり、極めてユニークな内容の収蔵展示施設である。

楡葉町は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震により深刻な被害を受けた。原発事故により全町民が避難を余儀なくされ、2015年9月から住民の復帰と町の復興が始まった。この復興の過程で楡葉町と東京大学の連携が始まり、2018年からは東京大学アイソトープ総合センターにより大学等の「復興知」を活用する福島イノベーション・コースト構想促進事業が始まった。さらに2019年度から東京大学総合研究博物館もその

連携に加わり、今回の新しい分館の開館が実現した。

連携ミュージアムは、楡葉町と東京大学総合研究博物館の両者にとって大きなメリットのある施設である。楡葉町では楡葉町歴史資料館が地震の被害を受けて以来再開の見込みが立っていなかった。一方、東京大学総合研究博物館は本館の収蔵資料が溢れ、深刻な狭隘化の問題を抱えていた。そこで、東京大学総合研究博物館は楡葉町歴史資料館の展示更新を支援し、一方、楡葉町歴史資料館分館を東京大学総合研究博物館の収蔵庫として利用させていただくことにより、双方の問題を解決することができた。

改修前の楡葉町歴史資料館の展示（図1）は、日本各地に多くある地元資料の展示館であった。遺跡の出土品、文書資料、民具や農機具、自然物など様々な地元の資料が並べられていた。展示室は典型的な昭和のデザインであり、令和に相応しい展示更新が望まれる状況であった。

今回新しく改装された展示室は、従来

の展示とは全く異なるものであり、主に以下の8つのコーナーからなる。(1) シンボル展示（図2A）：楡葉町の歴史のシンボルとして町内の炭鉱から産出した石炭が展示されている。(2) プレートテクトニクスと福島の地質（図2B）：地震は地球の表面を覆うプレートが動いて引き起こされる現象である。福島県の阿武隈山地は日本のプレートテクトニクス研究の発祥の地になった場所であり、東京大学に残されていた都城秋徳博士の研究試料を展示した。プレートの動きは地下資源を地上に押し上げ利用可能にする効果もあり、常磐地域で石炭が採掘できたのもプレートテクトニクスと関係することを説明している。各地の鉱物資源と炭鉱の位置を示す地図に加えて、石炭が形成されるまでの過程を標本とともに示している。(3) トンネル展示（図2C）：鉱石と化石の多様性を示す標本をトンネル状に配置した。東大のコレクションからセレクトした世界各地の標本を用いて、鉱石は成因別、化石は分類群別に配置して



図1 改修前の楡葉町歴史資料館の展示室。



図2 改装後の展示室。A. シンボル展示の楢葉町産出の石炭。B. プレートテクトニクスと福島の地質。C. 鉱物と化石のトンネル展示。D-E. 地球と生命の歴史を示すタイムライン展示。F. 楢葉町の歴史コーナー。G. 天神原遺跡の出土品(国指定重要文化財)。H. プロジェクションマッピングによる楢葉町の紹介。I. 未来展示ゾーン。

いる。(4) タイムライン展示(図2D, E): 地球46億年の歴史が始まって以来現在の楢葉町に至る歴史を1つの展示コーナーとして示している。隕石と鉱物の標本を用いて地球の歴史を説明し、その後の生命の誕生と、カンブリア紀以降の爆発的な生命の進化、5回の大量絶滅を生き延びた生命の歴史を化石標本とともに説明し、最後に現在楢葉町に生息している生物を配置し、地球と生命の歴史を表現している。(5) 楢葉町の歴史コーナー(図2F, G): 楢葉町の遺跡の発掘品や古文書、古写真を用いて町の歴史を時系列で説明している。特に、天神原遺跡の出土品は国の重要文化財に指定されており、存在感を発揮している。壁には楢葉町の地図上に展示資料の対応箇所が示されており、町内の歴史資料の位置関係を

把握しやすいように工夫されている。(6) プロジェクションマッピングによる楢葉町の史跡の紹介(図2H): ジオラマとプロジェクションマッピングを用いて町内の史跡を紹介する動画と、震災からの再生過程を表現した映像を流している。(7) 未来展示ゾーン(図2I): 地元の人々のインタビュー映像を流し、それを観た来館者が町の未来について自由に感想を書き残すことができるコーナーである。(8) 特別展示室: 定期的に更新可能な特別展示室を1室設けている。現在は小惑星リュウグウについての展示を行っている。今後は、バックヤード展示として、収蔵庫の様子を見学できる収蔵展示室と研究者や大学院生が研究を行う様子を見学できる研究現場展示の2室を追加整備する予定である。

展示室のある建物に隣接する収蔵庫はかつて楢葉町の商工会館として利用されていた建物である(詳細は本誌25巻1号で紹介した)。1階には鉱物・岩石標本、2階は古生物標本が収蔵されている。これらの多くはかつて東京大学総合研究博物館本館内で廊下等に溢れて積み上げられていた標本であり、建物の耐荷重に対して重量オーバーであることが指摘されていたが、移設によりその問題を解決することができた。収蔵標本は、使用頻度の高いものを東京に置き、現時点では使用頻度が低い歴史的に重要で長期保存が必要なものを楢葉町に収蔵している。しかし、移設後も必要に応じて福島と東京間では小規模な標本の移動が行われ、標本は有効に活用されている。

楢葉町との連携事業は常設展示のオー

Ouroboros

ブンで完了ではなく、新しい活動の出発点である。2023年8月9日には展示を担当した三河内、佐々木、白石と榎葉町役場の坂本和也氏による特別講演会を開催した。今後は特別展の定期更新により展示内容をさらに充実させ、講演会の定期開催等のイベント活動を展開していく予定である。榎葉分館の準備期間中には想定外のコロナ禍があったが、それをきっかけにリモートワークが定着し、福島と東京の距離感は大幅に縮小した。博物館にとっては複数拠点間でのネットワーク化が強化される効果があり、今後榎葉町分館の一層の発展が期待されている。



¹本館准教授／古生物学、

²本館教授／鉱物学、

³本館特任教授／展示デザイン、

⁴本館特任教授／建築学、

⁵本館特任助教／博物資源学、日本史学)

案内 本館展示

特別展示『骨が語る「生と死」 日本列島一万年の記録より』

会期：2023年9月30日（土）～2024年2月22日（木）

開館日：平日と9/30～12/23の土曜日
開館時間：10：00～17：00（入場は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

主催：東京大学総合研究博物館

協力：国立科学博物館、福島県立博物館、鎌倉市教育委員会、田原市教育委員会ほか

常設展示『UMUTオープンラボ——太陽系から人類へ』

会期：2021年11月11日（木）～

開館日：平日と9/30～12/23の土曜日
開館時間：10：00～17：00（入場は16：30まで）

会場：本郷本館展示場

IMT展示

特別公開『東大植物学と植物画 — 牧野富太郎と山田壽雄vol.4』

会期：2023年4月25日（火）から2023年9月3日（日）

会場：FIRST SIGHT (GUIMET ROOM)

主催：東京大学総合研究博物館

特別展示『東京エフェメラ』

会期：2023年4月29日（土）から2023年9月3日（日）

会場：GREY CUBE（フォーラム）

主催：東京大学総合研究博物館

特別公開『幻人紀行——ユウラシア蒐集録』

会期：2023年6月27日（火）から2023年10月29日（日）

会場：MODULE（モジュール）

主催：東京大学総合研究博物館

常設展示『Made in UMUT——東京大学コレクション』

会期：2023年6月27日（火）から

会場：COLONNADE 2 COLONNADE 3

主催：東京大学総合研究博物館

特別展示『アヴェス・ヤポニカエ（9）——表現のダイヴァーシティ』

会期：2023年8月12日（火）から11月3日（金）

会場：STUDIOLO（ストレージ）

主催：東京大学総合研究博物館

スクール・モバイルミュージアム『遭遇』

会期：2023年5月10日（水）～2023年9月30日（土）

開館時間：9：00～17：00

休館日：日曜日・祝日

会場：文京区教育センター 2階「大学連携事業室」

主催：東京大学総合研究博物館

共催：文京区教育センター

問い合わせ先：03-5800-2591（文京区教育センター）

学校対象教育実験プログラム

インターネットメディアテックでは、学校対象教育実験プログラム「アカデミック・アドベンチャー」の募集を行っています。学校行事や授業で当館を訪れる小・中学生を対象に、大学生ボランティアが「インターメディアイト」（媒介者）として一緒に展示物を観察・鑑賞し、自由に對話する体験を通じて、子どもたちが自らの好奇心を拓き、探求心を深めることのできる創造的な学術探検の機会を提供いたします。

利用日時：水曜日の9時半から12時までの間の約1時間（実施日は応相談、プログラム開始は一般向け開館時間前となります）

利用内容：大学生ボランティアが務める「インターメディアイト」の案内による対話式展示観覧

募集対象：小・中学校の学校団体（国公立・私立は問いません）

利用人数：1団体あたり児童・生徒数4名から60名程度まで

入館料・参加費：無料

申込期限：利用希望日の30日前まで

申込みおよび問い合わせ連絡先：050-5541-8600（ハローダイヤル）

ニュース

本館展示

本館では、以下の展示を公開いたしました。

・2023年3月23日（木）～2023年9月1日（金）特別展示『東京大学・若林鉱物標本：日本の鉱山黄金時代の投影』

IMT展示

インターメディアテクでは、以下の展示を公開いたしました。

・2023年3月21日（火）～4月23日（日）特集『学びの窓——アカデミアの東京大学医学部ゆかりのコレクション』

・2023年1月20日（金）～5月7日（日）インターメディアテク開館十周年記念特別展示『極楽鳥』

・2023年2月7日（火）～6月4日（日）特別公開『カトレヤ変奏——蘭花百姿コレクション』

スクール・モバイルミュージアム

文京区教育センターにて、2022年11月29日～2023年3月31日に『東大地質図コレクション』を公開いたしました。

サウンドスケープ・モバイルミュージアム

東京タワーにて、2023年3月17日～5月7日に東京大学×東京タワーコラボレーション企画『音景夜——トウキョウヘオモイヲハセル』を公開いたしました。

IMTイベント

インターメディアテクでは、以下のイベントを開催いたしました。

・2023年3月24日（金）ディスカッション『戦後日本美術の決定的瞬間——美術出版社写真アーカイブの現在』

・2023年4月25日（火）音楽パフォーマンス『鳥を奏でる』

小石川分館イベント

小石川分館では、館外イベント『AnnEX Lab.ソトラボ』として、以下が開催されました。

・第8回『時を彩る 先史イラン彩文土

器の世界』

日時：2023年5月12日（金）17：00～17：30

講師：三木健裕（本館特任助教／西アジア考古学）

アカデミックアドベンチャー

インターメディアテクにてアカデミック・アドベンチャーを開催し、以下の学校・団体にご参加いただきました。

・2023年3月10日（金）

文京区立第六中学校 1年生（Zoomによるオンライン双方向授業）

・2023年7月19日（水）

桜丘中学・高等学校 中学3年生

・2023年7月26日（水）

普連土学園中学校・高等学校 中学1～3年生

・2023年8月2日（水）

桐朋学園小学校 3年生

受賞

松本文夫特任教授（建築学）が2023年「日本建築学会教育賞（教育貢献）」を受賞しました。この賞は近年中に実践された建築に関する教育であって、建築教育の発展に貢献した優れた教育を行った会員に表彰するものです。また、米田 穰教授（年代学、先史人類学）が「第13回日本考古学協会賞優秀論文賞」を受賞しました。この賞は考古学上の業績および関連諸分野における考古学関係の業績に表彰するものです。

本館来館者

事前に申し込みのあった主な本館来館者は以下のとおりです（2023年2月1日～7月31日、敬称略）。

越谷市立富士中学校、岡山県立岡山一宮高等学校、済美平成中等教育学校、品川区立立会小学校、このえ本駒込第二保育園、岡山県立倉敷青陵高等学校、江戸川区こども未来館、台湾大直高校、千葉県立小金高等学校 生物部、日本ケルト協会、鶴岡市立鶴岡第五中学校、千葉県立船橋高等学校、明誠学院高等学校、韓国延巖大学（Yonam University）、千

駄ヶ谷日本語学校サマーコース、新구대 학교 (Shingu College)、東京大学華人科学技術促進会、清泉女学院、東京都立上野高等学校、芝国際高等学校、清華大学、大韓民国浦項IDONG高校、広島市立広島中等教育学校、未来学院、茨城県立土浦第一高等学校

ボランティアのご協力

本館では、2023年2月1日から7月31日の間、下記22名の方々にボランティアとしてご協力いただきました。

飯干ユミ、金子清敏、金子清子、神田理子、越 章夫、佐藤れい子、添田禮子、竹下勝人、竹内輝子、成岡須美子、兵頭勝、淵上妙子、船窪英子、古川真由美、星 佳子、細野 剛、水谷浪子、柳清勉、山田節子、柚木陽子、渡邊淳子、渡辺佐起（敬称略）

インターメディアテクでは、2023年2月1日から2023年7月31日の間、下記19名の方々にIMTボランティアとしてご協力いただきました。

伊藤 光、尹 杰、大谷凜音、栢場美帆、川並仁美、北里萌音、黒澤 萌、越田勇氣、古藤 南、永田柊弥、袴田光平、長谷川智也、三平侑里奈、森 綾乃、森元春陽、谷地美翔子、山極瑞夕、山口菜月、李 牧（敬称略）

東京大学コレクション未来基金

本基金は、当館が所蔵する400万点以上の貴重な学術標本資料群「東京大学コレクション」を、維持・発展させるために設立いたしました。立ち上げからまだ一年余りですが、多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。基金の趣旨や活動報告は下記ウェブサイトに掲載してございます。何とぞ、引き続き、温かいご支援をお願い申し上げます。

<https://utf.u.tokyo.ac.jp/project/pjt146>

博物館教職員

2023年3月31日付けで永井慧彦特任研究員、金銀眞学術専門職員、川本万里奈事務補佐員、DONG LIANG技術補佐員が退職しました。同年4月1日付けで

Ouroboros

徳山裕憲一般技術職員が技術専門職員に昇任し、小澤仁嗣特任研究員、南久美子事務補佐員が着任しました。同年5月1日付けで金銀眞学術専門職員、5月16日付けで松保小夜子学術専門職員、7月16日付けで末久聖子技術補佐員が着任しました。事務部では、2023年3月31日付けで杉田佳代子博物館事業課長が定年により退職し、4月1日付けで濱田真実子博物館事業課長が着任しました。同年7月7日付けで長井由梨子事務補佐員が、7月31日付けで中仙道美雪事務補佐員が退職しました。

現在の博物館のスタッフは以下のとおりです。

館長

西秋 良宏

研究部

キュラトリアル・ワーク研究系

教授 遠藤 秀紀

(比較形態学、遺体科学)

教授 海部 陽介

(人類進化学・形態人類学)

准教授 池田 博 (植物分類学)

准教授 佐々木 猛智

(動物分類学、古生物学)

講師 矢後 勝也

(昆虫自然史学、保全生物学)

特任助教 和田 英敏

(魚類分類学、生物地理学)

博物資源開発研究系

教授 西秋 良宏 (先史考古学)

教授 三河内 岳

(惑星物質科学、鉱物学)

特任助教 三木 健裕

(西アジア考古学)

博物情報メディア研究系

准教授 森 洋久 (情報工学)

助教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

放射性炭素年代測定室

教授 米田 穰

(年代学、先史人類学)

特任研究員 尾寄 大真

(年代学、宇宙・地球化学)

特任研究員 大森 貴之

(年代学、分析化学)

タンデム加速器分析室

教授 松崎 浩之

(加速器質量分析、同位体地球化学)

技術専門職員 土屋 陽子

(加速器質量分析試料調整、分析化学)

技術専門職員 徳山 裕憲

(加速器技術、加速器質量分析)

特任研究員 宮田 佳樹

(考古科学、文化財科学)

小石川分館

担当教員・助教 金崎 由布子

(アンデス考古学)

ミュージアムテクノロジー寄付研究部門

担当教員・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

特任教授 松本 文夫 (建築学)

特任教授 洪 恒夫 (展示デザイン)

特任助教 白石 愛 (博物資源学)

インターメディアテク寄付研究部門

IMT 館長・教授 西秋 良宏

(先史考古学)

主任・准教授 森 洋久 (情報工学)

特任准教授 関岡 裕之

(博物館デザイン)

特任准教授 松原 始 (動物行動学)

特任准教授 寺田 鮎美

(文化政策、博物館論)

特任助教 菊池 敏正 (文化財保存学)

特任研究員 中坪 啓人 (動物学)

特任研究員 上野 恵理子

(建築、美術解剖学)

顧問 (名誉教授) 西野 嘉章

(博物館工学、美術史学)

国際デザイン学寄付研究部門

特任准教授 (兼務) 森 洋久

(情報工学)

特任研究員 大澤 啓

(美学、美術史学)

特招研究員

秋篠宮文仁 (生き物文化誌学)

大場 秀章 (植物分類学)

諏訪 元 (自然人類学、古人類学)

田賀井 篤平 (鉱物学)

林 良博 (国際動物学)

吉田 邦夫 (年代学、考古科学)

*スタッフは2023年7月現在で掲載

Ouroboros 第77号

東京大学総合研究博物館ニュース

発行日：2023年8月31日

編集人：矢後勝也・金崎由布子・佐々木猛智

発行人：西秋 良宏

発行所：東京大学総合研究博物館

住所：東京都文京区本郷7丁目3-1

郵便番号：113-0033

電話：050-5541-8600 (ハローダイヤル)

F a x : 03-5841-8451

E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp

Designed by Ken Sakamura

Printed in Japan

ISSN 1342-3614

本号の内容は本館ホームページ (<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>)
でもご覧になれます。多くの写真はカラーです。